

「さいたま・水とみどりのアカデミー」開講にあたって

さいたま市は一〇〇万を超える人々が住む巨大都市です。また首都圏に位置する埼玉県も全体的には都市社会です。その都市のもろさを三・一一の巨大地震が見せつけました。このアカデミーは、現代都市の基盤をなす自然、都市を支える農業、私たちの歴史、そして地球環境などを「水とみどり」を中心にもう一度見直し、持続可能な都市社会をみんなと考えていこうとするものです。

東日本震災では、陸前高田の一本残った松がしばしば放映されました。ここで考えていただきたいことは、海岸の松はもともと自然にあったものではなく、人が植えてきたものだという事です。ではなぜ海岸に松を植えたのでしょうか。

昭和の初めに私の研究室の教授が新潟で講演をした時、「今に新潟市が砂で埋まる」と警告しました。実際、半世紀前の海岸に近い集落の写真を見ると、農家が砂で埋まっています。今、日本にそのような所はありません。

集落も家も埋めてしまうような大量の砂はどこから来たのでしょうか。海の石が砂になっ

たわけではありません。山から送られて来たのです。雨や雪で山が削られ、礫や土砂になって川を下り、最後は砂になって海に運ばれました。そんなにかくさんの砂がどうして海に下ったのでしょうか。日本の山が荒れていたからです。

日本では建築にも、燃料にも、肥料にも、山の木を使いました。ですから日本の山の多くは古くからはげ山でした。人口が増えた江戸時代はさらにはげ山が増えました。今、農業に用いる山を「里山」と呼んで美化しますが、里山の実態ははげ山だったのです。

日本の山が緑で覆われるようになったのはこの五〇年足らず。戦後、日本中で植林をしたから、また高度成長期以降、モノを作るにも、燃料・肥料にも地下資源を使うようになったからです。木材を使わなくなつて、日本の山が緑で覆われるようになって、山崩れも海に送られる砂も減りました。でも、この地球環境を作るために永い時間をかけて地下に閉じ込めた物質を資源と言って安易に取り出して良いのでしょうか。

私たちはこのたびの災害の大きさに打ちのめされますが、それを乗り越えるためにも、問題の本質をしっかりと学び、考えていきたいと思えます。